

首の短い男の話 (北海道)

わたしは、りっぱな村長むらおさで、りっぱな妻となかよく暮らしていました。

いつのころからか、村人たちのあいだで、こんなうわさが立つようになりました。

「東のほうから、首のひどく短い男が村々を訪れて、その村の村長に、六つの谷を越えたむこうまで、小便の飛ばしくらべをしようと申しこむそうだ。さそいに乗ってその男といっしょに山へ出かけた村長は、ひとりもどって来ないということだ」

わたしは、それがもしほんとうなら、そいつはわたしの村だけを見逃すはずはないのだから、いずれここにもやって来るにちがいないと思いました。そして、六つの谷を越えて小便を飛ばせる人などいるはずがないから、そいつは悪い神にちがいないと思って、わたしの守り神さまたちに、助けしてくれるように一心にいのりました。妻もひどく心配して、こっそり涙を流していました。

ある日の夕暮れ、家の外で犬がほえたので妻が戸口に出てみました。妻は、引き返してきて、そいつがやって来たことをわたしに告げました。

わたしは、お客用の席をととのえて、その男をていねいにまねき入れました。それは、背がひどく低くて色の黒い、首の短い男でした。あいさつをかわしましたが、男はどこからやって来たのかを話ませんでした。妻がご飯を出すと、よろこんで食べました。

わたしが、さかんに話しかけていると、とちゅうで、男は、ちよつと話したいことがあるといいました。わたしが、

「何ですか」ときくと、男はいいました。

「六つの谷を越えて小便の飛ばしくらべをしようじゃないか。できなかつた者を殺すことにしよう」

わたしは、とても腹が立って、男に飛びかかりそうになりましたが、

(待て、待て。こいつがほんとうに六つの谷を越えて小便を飛ばすかどうか、見とどけてから、やっつけてもおそくはない)と考えました。そこで、にこにこ笑いながら、

「六つや七つの谷のむこうへ小便を飛ばすぐらい、わけない話ですよ」と答えました。男は、ひどくおどろき、そして喜びました。

つぎの朝早く、白い雲と黒い雲がたなびくころに起き出して、たっぷり朝ごはんを食べてから、首の短い男といっしょに山の狩り小屋へ行きました。

谷が続く山の上に立って、わたしは男にいいました。

「さあ、あなたから先にやって見せてください。わたしは後からやります」

男は、うなずき、小便を飛ばし始めました。ほんとうに、六つの谷を越えて、長く長く飛

飛ばしました。わたしは、あきれてしまいました。そして、いきなり、その男を後ろから突き飛ばしたのです。

すると男は、なんと、首のもげたとつくりになって転がり、その口から水がどくどく流れ出ているのでした。あまりのことに、わたしは、笑うことも怒ることもできないで、ぼうぜんと立ちつくしました。首のもげたとつくりが男に化けて、はるばる東の国から悪さをしながらやって来たあげく、わたしの所で、正体を見破られたのでした。けれども、何のためにとつくりがそんなことをしたのか、わけが分かりません。

そこで、わたしは、狩り小屋に泊まって、夢にたずねることにしました。御幣ごひいを立ててお祈りをし、火をたき、ご飯を供えて、床につきました。すぐに眠るつもりはなかったのに、いつのまにがぐつすり寝こんでしまいました。すると、まくらもとに、あの首の短い男が立って、いいました。

「もし、浦士別うらしべつの村長さま。わたしのいうことをよく聞いてください。

わたしは、自分の素性すじょうも知らずに、東の国からあのような悪さをしながらやって来たのですが、きょう、あなたにだしぬけに突き飛ばされて転んだひょうしに、自分がとつくりだったことが分かりました。

今思えば、わたしは、むかし、神さまの狩り小屋で、水入れとして使われていました。ところが、ある年、山つなみで小屋が押し流され、わたしは川に落ちて、石にぶつかって首がもげてしまいました。そのまま川を流れ流れて海に出ました。海の底を、あっちへころり、こっちへころりと何年も転がっていると、海の神さまが、わたしをあわれんでくださいました。神さまの使った器があっちへころり、こっちへころりところがったあげくに朽くちてしまふのはもつたないことだということです。海の神さまは、わたしを人間ひたに造つくって人間の国に打ち上げてくださいました。

けれども、わたしは自分の素性が分からなくて、あのような悪いことをしながら村々を回っていたのでした。今、あなたのおかげで、初めて自分の素性を知ることができました。心からお礼申し上げます。

この国にありとある物、なべ、さかずき、おわん、うす、きね、みの、そのほか、男の使う物、女の使う物が、使い古してこわれたときは、むやみに捨てないで手あつくほうむり、焼くべきものは焼けば、そのたましいは神の国へ行くし、神棚に祭れば、そのたましいは神のもとへ帰って行くのです。わたしのした事をあなたは怒っておられるかもしれませんが、神のもとへのぼれるようにほうむってくださいれば、お礼に、あなたがたに子どもが生まれ栄えるようにします。これまで殺したたくさんたくさんの村長たちは、すでに、よみがえらせてふるさ

とに帰らせました」

わたしは、夢から覚めました。

夜が明けると、わたしは首のもげたとつくりを捨てて家に帰りました。わたしが無事だったのを見て、妻は、泣いて喜びました。

わたしは、とつくりを神棚に祭って、手あつくほうむり、夢で聞いたとつくりの神のことばを遠くの村、近くの村に伝えました。そうして、この教えをけっして忘れないで、使い古したものをむやみに捨てないようにと、子どもたちに教えながら、今、わたしは年老いて死んでいくのです。

と、浦士別の村長が語りました。

原話：『旅と伝説第7年12月号』三元社／昭和9年
再話：村上郁◎